

■ 概況

7/4~7/10のNYMEX・WTIは、57.51~60.43ドルの範囲で推移した。

7月11日は、この日のOPEC月報の2020年対OPEC原油需要の前年比134万b/d減の下方修正などを背景とした売りが広がり、6営業日ぶりに反落した。ただ、英領ジブラルタルでのイラン・タンカー拿捕をめぐる緊張の高まり、メキシコ湾への暴風雨襲来による洋上施設からの従業員退避などが、下値を支えた。8月限終値は前日比0.23ドル安の60.20ドル。

週末12日は、熱帯低気圧「バリー」接近に伴う米国の供給不安・イランをめぐる緊張の高まりと世界的な経済の先行き不安・石油需要の減少懸念が拮抗し、わずかに反発した。8月限終値は前日比0.01ドル高の60.21ドル。

週明け15日は、中国統計局の本年第2四半期のGDP成長率が前年同期比6.2%と統計開始の1992年以来最低となり、中国経済の減速が明確になったこと、ドル高の進行で原油先物の割高感が意識されたことから、売りが先行、反落した。8月限終値は前日比0.63ドル安の59.58ドル。

16日は、ポンペオ米国務長官がイランがミサイル計画につき協議の用意があると表明したと発言、イランをめぐる緊張の緩和期待が膨らみ、大幅続落した。メキシコ湾洋上油田での生産再開の動きが出ていることも、価格押し下げ要因となった。8月限終値は前週末比1.96ドル安の57.62ドル。

17日は、米国エネルギー情報局(EIA)の在庫週報で、原油が前週比310万バレル減と5週連続の取り崩しとなったもの

の、ガソリンが360万バレル増、中間留分が570万バレル増となったことから、もみ合いが続いたが、結構売りが優勢で、3日続落した。8月限の終値は前日比0.84ドル安の56.78ドル。

アジアの指標原油である中東産ドバイ原油/東京市場(8月渡し)は7月4日~10日の間61.20~63.60ドルの範囲で推移した。7月11日65.70ドル、12日65.60ドル、16日64.80ドル、17日63.00ドルで推移した。

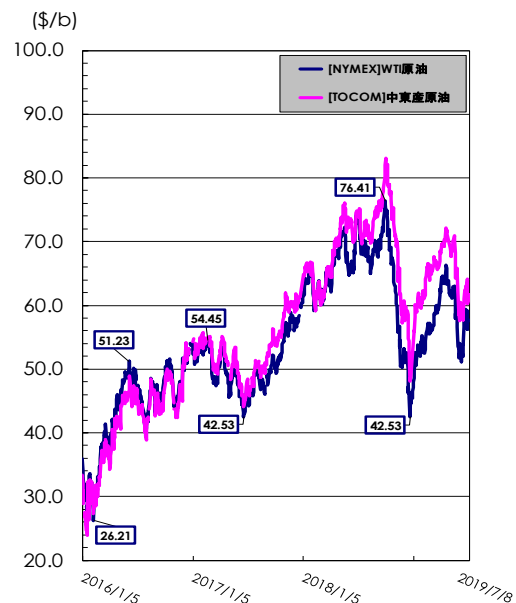
為替は7月4日~10日の間107.81~109.01円の範囲で推移した。7月11日108.20円、12日108.54円、16日107.97円、17日108.32円で推移した。

財務省が7月18日に発表した貿易統計(速報・旬間)によると、6月下旬の原油輸入平均CIF価格は、49,564円/klで、前旬比482円安、ドル建てでは72.71ドルで前旬比0.40ドル安。為替レートは1ドル/108.36円だった。また、同日の貿易統計(速報・月間)によると、6月の原油輸入平均CIF価格は、50,137円/klで、前旬比828円安、ドル建てでは73.08ドルで前旬比0.09ドル高。為替レートは1ドル/109.07円だった。

そのような中で、7月16日時点の小売価格は、ガソリンが前週比0.2円の値下がり、軽油も同0.2円の値下がり、灯油は同2円の値下がり(18%ベース)だった。ガソリン・軽油・灯油ともに、2週ぶりの値下がりだった。

この週(7月第3週)の原油コストは値上がりし、次週の元売の卸価格はガソリン・軽油・灯油ともに、全社2.0円の値上げとなった。

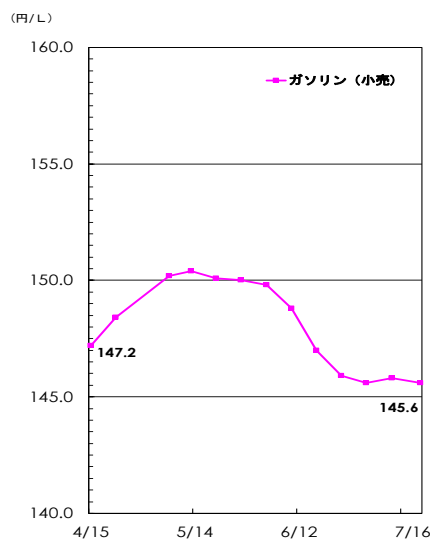
原油		今週	前週比	前年比
需給	原油処理量 (千kl)	7/7 ~ 7/13	3,310 ▲ 49	▼ -
	トッパー稼働率 (%)	"	84.5 ▲ 1.2	▼ -
	原油在庫量 (千kl)	7/13	13,611 ▲ 646	▲ -
価格	中東産原油(TOCOM) (\$/bbl)	7/16	63.81 ▲ 2.09	▼ -5.8
	WTI原油(NYMEX) (\$/bbl)	7/15	59.58 ▲ 1.92	▼ -8.5
	原油CIF単価 (\$/bbl)	6月下旬	72.71 ▼ -0.40	▼ -3.71
	①原油CIF単価 (¥/kl)	"	49,564 ▼ -482	▼ -3,219
	②ドル換算レート (¥/\$)	"	108.36 ▲ 0.47	▲ 1.45
	外国為替TTSレート (¥/\$)	7/16	108.97 ▲ 0.57	▲ 4.47



(単位: 千kl、円/%)

ガソリン		今週	前週比	前年比	
需給	生産	7/7 ~ 7/13	912 ▼ -67	▼ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	872 ▼ -15	▼ -	
	輸出	"	0 ▼ -82	▼ -	
	在庫	7/13	1,530 ▲ 40	▼ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	7/9 ~ 7/15	59.0 ▼ -0.4	▼ -9.2	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	7/9 ~ 7/15	57.9 ▲ 1.5	▼ -7.2
		(TOCOM/中部)	7/12	59.0 ▲ 1.0	▼ -6.1
	小売 [週動向] (資工庁公表)	7/16	145.6 ▼ -0.2	▼ -6.7	

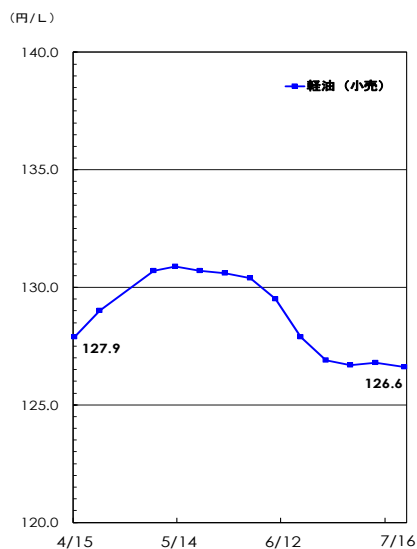
※業転、先物価格は税抜き価格



(単位: 千kl、円/%)

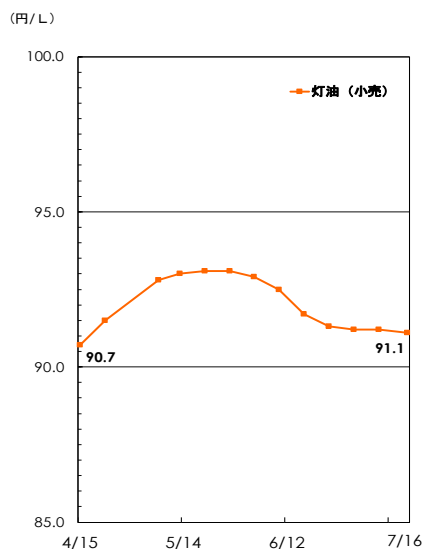
軽油		今週	前週比	前年比	
需給	生産	7/7 ~ 7/13	786 ▼ -35	▼ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	635 ▼ -24	▲ -	
	輸出	"	68 ▼ -143	▼ -	
	在庫	7/13	1,344 ▲ 83	▼ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	7/9 ~ 7/15	61.6 ▼ -0.6	▼ -8.3	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	7/9 ~ 7/15	62.4 ▼ -0.1	▼ -8.6
		(TOCOM/中部)	7/12	-	-
	小売 [週動向] (資工庁公表)	7/16	126.6 ▼ -0.2	▼ -4.2	

※業転、先物価格は税抜き価格



(単位: 千kl、円/%)

灯油		今週	前週比	前年比	
需給	生産	7/7 ~ 7/13	145 ▼ -17	▲ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	68 ▼ -42	▲ -	
	輸出	"	19 ▼ -3	▼ -	
	在庫	7/13	1,585 ▲ 58	▲ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	7/9 ~ 7/15	61.0 ▼ -0.5	▼ -8.2	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	7/9 ~ 7/15	58.8 ▲ 1.5	▼ -10.1
		(TOCOM/中部)	7/12	60.5 ▲ 1.5	▼ -7.7
	小売 [週動向] (資工庁公表)	7/16	91.1 ▼ -0.1	▼ -1.9	



■ 関連情報

1 海外/原油

7月17日のNYMEX市場WTI原油は、前日までの値下がり
の反動で安値拾いの買いが先行したが、米国エネルギー情
報局(EIA)の在庫週報で、原油が前週比310万バレル減と
市場予想(270万バレル減)を上回る5週連続の取り崩しと
なったものの、ガソリンが360万バレル増、中間留分が570
万バレル増と、市場予想(各々90万バレル減・60万バレル
増)を大きく上回る積み増しになったことから、評価が分か
れ、もみ合いが続いたが、結局売りが優勢となり、3日続落
した。ペーカーヒューズ社の米国稼働石油掘削装置数は
784基で前週比4基減2週連続の減少。8月限の終値は前日

比0.84ドル安の56.78ドル、9月限の終値は前日比0.82ド
ル安の56.92ドル。

EIAによると、7月15日時点のガソリンの小売価格は、前
週比3.6セント値上がりの1ガロン2.779ドル(80.3円/ℓ)、
ディーゼルは同0.4セント値下がりの3.051ドル(88.7
円/ℓ)となった。ガソリンは3週連続の値上がり、ディーゼ
ルは2週ぶりの値下がりだった。

2 国内/製品需給 (1) 出荷

石連週報によれば、2019年7月7日～7月13日に休止し
たトッパー能力は33.1万バレル/日で、前週に対して3.9万
バレル/日減少した(全処理能力は351.9万バレル/日)。原
油処理量は331.0万klと、前週に比べ4.9万kl増加。前年
に対しては2.2万klの減少。トッパー稼働率は84.5%と前週に
対して1.2ポイントの増加、前年に対しては0.6ポイントの減
少となった。

生産は前週に比べてジェット、A重油が増産となり、その
他の油種で減産となった。ガソリン/6.8%減、ジェット/28.0%
増、灯油/10.7%減、軽油/4.2%減、A重油/5.3%増、C重
油/15.4%減。今週のC重油の輸入は0.0万kl(前週比0.0万
kl減)。軽油の輸出は6.8万kl(前週比14.3万kl減)。

出荷(輸入分を除く)は、前週比ではジェット、A重油が増
加となり、その他の油種で減少となった。前年比ではジェッ
ト、灯油、軽油が増加となり、その他の油種で減少となった。
ガソリンの出荷は87.2万 kl(対前週1.7%減)と2週振り
で減少となり、28週連続で100万klを下回った。ジェット12.7万kl
(対前週26.1%増)、灯油6.8万kl(対前週38.0%減)、軽油
63.5万kl(対前週3.6%減)、A重油17.8万kl(対前週27.3%
増)、C重油15.2万kl(対前週1.7%減)。

(単位:千KL)

	今週 (7/7 ~ 7/13)	前週 (6/30 ~ 7/6)	前週比
ガソリン	872	887	▼ -15 (-2%)
ジェット燃料	127	101	▲ 26 (26%)
灯油	68	110	▼ -42 (-38%)
軽油	635	659	▼ -24 (-4%)
A重油	178	140	▲ 38 (27%)
C重油	152	155	▼ -3 (-2%)
合計	2,032	2,052	▼ -20 (-1%)

※今週出荷量 = (前週末在庫 + 今週生産 + 今週輸入) - (今週輸出 + 今週末在庫)

2 国内/製品需給 (2) 在庫

7月13日時点の在庫は、全ての油種で積み増しとなった。
前年に対しては、灯油で積み増しとなり、その他の油種で取
り崩しとなった。

ガソリンは153.0万kl、前週差4.0万kl増。前年に対しては
0.7万kl少ない。

灯油は158.5万kl、前週差5.8万kl増。前年に対しては3.7
万kl多い。

軽油は134.4万kl、前週差8.3万kl増。前年に対しては
11.1万kl少ない。

A重油は71.0万kl、前週差1.4万kl増。前年に対しては1.9
万kl少ない。

C重油は198.6万kl、前週差1.2万kl増。前年に対しては
1.9万kl少ない。

(単位:千KL)

	今週 (7/13)	前週 (7/6)	前週比
ガソリン	1,530	1,490	▲ 40 (3%)
ジェット燃料	916	878	▲ 38 (4%)
灯油	1,585	1,527	▲ 58 (4%)
軽油	1,344	1,261	▲ 83 (7%)
A重油	710	696	▲ 14 (2%)
C重油	1,986	1,974	▲ 12 (1%)
合計	8,071	7,826	▲ 245 (3.1%)

3 国内/製品卸売価格 (1) 元売会社 仕切価格改定動向

7月9日～15日の原油価格は、前週比で値上がりし、為替レートも円安で、原油コストは値上がりしたものと見られる。

陸上スポット価格は、7月9日～15日の間、ガソリン112～113円台で値上がり、軽油61～62円台値下がり、灯油60～61円台で一時値下がり後回復して推移した。

海上スポット価格は、同期間で、ガソリン114～115円台で値下がり後やや回復、軽油63円台で値上がり、灯油56円台で値上がりして推移した。

先物価格は、同期間で、ガソリン111～112円台で値上がり、軽油62円台で値上がり、灯油57～59円台で値上がりして推移した。

次週の元売の卸価格は、ガソリン・灯油・軽油ともに、全社2.0円の引き上げとなった。

3 国内/製品卸売価格 (2) 業転価格・先物価格動向

7月9日～15日の製品スポット市況は、7月2日～8日平均と比べ、全油種の陸上取引と軽油先物で値下がり、ガソリン海上で横ばいと、油種・取引でバラつきが見られた。

直近の陸上スポット価格(7/9～7/15千葉、川崎、中京、阪神の4地区の陸上ラック価格平均値)は、前週比で、ガソリンは0.4円の値下がり、灯油は0.5円の値下がり、軽油は0.6円の値下がりだった。

東京湾渡しの海上スポット平均価格は、前週比で、ガソリンは横ばい、灯油は0.6円の値上がり、軽油は0.2円の値上がりだった。

先物価格は、前週比で、ガソリンが1.5円の値上がり、灯油は1.5円の値上がり、軽油は0.1円の値下がりだった。

7月第4週の大手元売の卸価格は、ガソリン・軽油・灯油ともに、全社2.0円の値上げだった。なお、元売会社は、2010年から卸価格の改定に際して、原油や製品相場、他社仕切りなどの動向を総合的に判断する方式としたが、2014年6月から、原油調達コストをより重視する方式に変更した。

(RIM) (単位: 円/%)

[陸上ローリー4地区平均]	今週 (7/9～7/15)	前週 (7/2～7/8)	前週比
レギュラー	59.0	59.4	▼ -0.4
灯油	61.0	61.5	▼ -0.5
軽油	61.6	62.2	▼ -0.6

(TOCOM) (単位: 円/%)

[期近物/終値] [平均]	今週 (7/9～7/15)	前週 (7/2～7/8)	前週比
レギュラー	57.9	56.4	▲ 1.5
灯油	58.8	57.3	▲ 1.5
軽油	62.4	62.5	▼ -0.1

※上記価格は税抜き価格

参考値 (7/9～7/15実績値) (単位: 円/%)

油種	現物	先物	平均
ガソリン	▼ -0.4	▲ 1.5	▲ 0.6
灯油	▼ -0.5	▲ 1.5	▲ 0.5
軽油	▼ -0.6	▼ -0.1	▼ -0.4
A重油	▼ -0.4		

(出所) 現物: RIM社陸上ローリー4地区平均価格

(千葉・川崎・中京・阪神)

先物: TOCOM京浜地区海上バージ渡し平均価格

4 国内/製品小売価格

7月16日時点のSS店頭価格は、ガソリンが前週比0.2円安の145.6円、軽油も同0.2円安の126.6円、灯油は18%ベースで同2円安の1,640円(1%ベースでは同0.1円安の91.1円)だった。ガソリン・軽油・灯油ともに2週ぶりの値下がりだった。都道府県別には、値上がりしが8道県、横ばいが14府県、値下がりしが25都府県だった。全国最安値は宮城県(139.1円(前週比横ばい)、その次は埼玉県の139.7円(同0.4円安)、最高値は長崎県の157.4円(同0.2円安)であった。最も値上がりしたのは0.4円高の北海道(144.4円)、値下がりしたのは1.4円安の福島県(146.2円)だった。

先週の原油コストは値下がりし、今週適用の大手元売の卸価格は、ガソリン・軽油・灯油ともに、1.0円～1.5円の値下げに分かれた。

今週は、原油価格は値上がりし、為替レートも円安で、原油コストは値上がりし、次週適用の元売の卸価格は、ガソリン・軽油・灯油ともに全社2.0円の引き上げとなった。次週(7月22日)のガソリン・灯油の小売価格は値上がり予想される。

(資工庁公表) (単位: 円/%)

[週動向]	今週 (7/16)	前週 (7/8)	前週比	直近高値
レギュラー	145.6	145.8	▼ -0.2	08/8/4 185.1
灯油	91.1	91.2	▼ -0.1	08/8/11 132.1
軽油	126.6	126.8	▼ -0.2	08/8/4 167.4

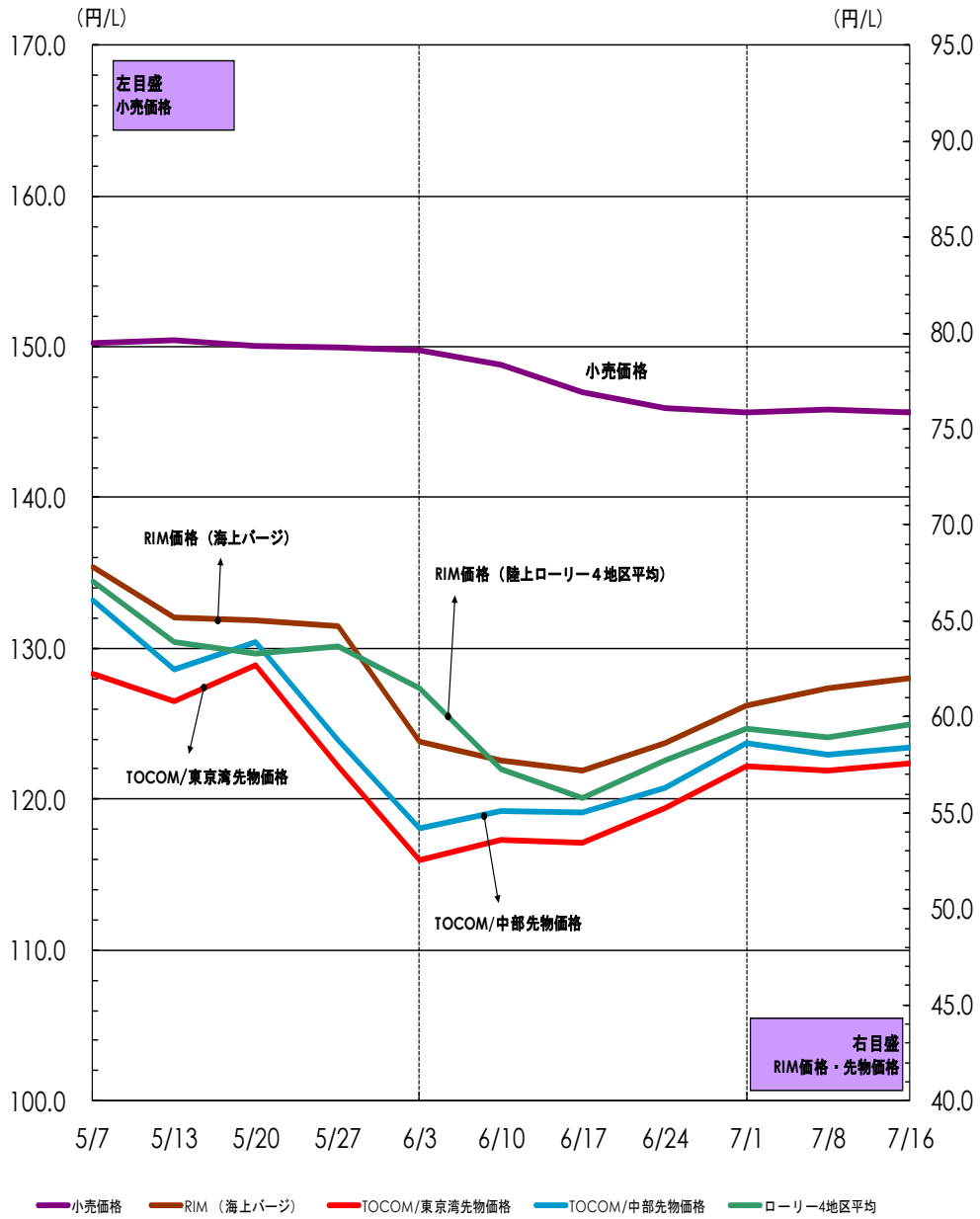
※ 現金一般価格の全国平均値 (消費税込み)

07年4月以降 2,000店舗を対象。

直近高値とは2003年10月以降の最高値。

ガソリン価格推移

(2019/5/7 ~ 2019/7/16)



(注)①「小売価格」は消費税込みの価格 RIM価格・TOCOM先物価格は税抜き価格
 ②RIM価格(陸上ローリー)は4地区平均価格

■ お知らせ

本レポートは当センターのホームページ (<https://oil-info.ieej.or.jp>) にも掲載しています。
次回(2019第16号)の公表は、7/26(金)14:00です。

「セルフSS出店状況」(平成30年9月末現在)は、12月19日(水)14:00に公表しました。当センターのホームページをご覧ください。

本レポートのご利用について

本レポートについて、テキスト、グラフィックス及びその他の情報(以下、併せて「ドキュメント」)に関わるすべての知的所有権は、一般財団法人日本エネルギー経済研究所石油情報センター(以下、当センター)又は当センターヘドキュメントを提供している第三者へ独占的に帰属します。

当センターの事前の書面による承諾を得ることなく、ドキュメントを転用、複製、改変等の一切を固く禁じています。

また、ドキュメント内容に関しては万全を期していますが、その内容の正確性および安全性を保証するものではありません。

「ウィークリー オイル マーケット レビュー」とは

平成16年5月に経済産業省資源エネルギー庁資源・燃料部石油流通課 主催の「石油製品市場動向研究会」が取りまとめた中間報告で、「わが国石油産業における市場機能、価格発見機能が更に強固なものとなることが望まれるとともに、中期的な課題として、石油産業において確立していく市場機能、価格発見機能に基づく合理的な価格認識及びそれを踏まえた自己責任の下での経営判断の必要性について、石油産業関係者の認識が更に深まることにより、わが国の基幹産業である石油産業全体としての合理性、活力が一層高まることを期待したい。」と提案されています。

当センターでは、これを受けて石油連盟、全国石油商業組合連合会をはじめ関係機関等の協力を得て、石油関係者、企業の経営者層(特に給油所経営に携わる方々)から一般消費者の方々に対し、原油・石油製品需給や価格動向を的確に理解するツールの一つとして、「ウィークリーオイルマーケットレビュー」を平成17年5月より定期的に発信しています。

本レポート掲載データの出所について

①【原油・石油製品需給】〈石連週報〉

石油連盟(石連)「原油・石油製品供給統計」週報データを千KL単位に換算して採用。

「出荷」は当センターの推計。

②【原油・先物価格】〈WTI原油、中東産原油〉

WTI原油は、ニューヨーク商業取引所(New York Mercantile Exchange : NYMEX) WTI原油先物の期近物・終値を採用。

中東産原油は、東京商品取引所(The Tokyo Commodity Exchange : TOCOM) 中東産原油の期近物・終値を採用。 ※「二番限(翌月限)」

中東産原油は、ドバイ原油及びオマーン原油の平均価格を指標としている。為替換算レートとして、三菱東京UFJ銀行発表TTM(Telegraphic Transfer Middle rate : 中値)を採用。

原油CIF単価は、財務省貿易統計「原油・粗油平均CIF単価」(旬間値)を基に、石油連盟が試算したドル表示の参考値を採用。

③【国内製品・元売仕切価格】

元売仕切価格は、元売会社(一次卸)と系列特約店など(二次卸)との間で売買される卸価格。

元売会社は、平成22年4月以降、現行の新価格体系を見直し、原油や製品相場、他社仕切りなどの動向を総合的に判断し、具体的方針を決める方式に変更。さらに平成26年6月以降、原油コストをより重視する方式に変更している。

④【国内製品・業転価格】〈RIM業転〉

国内陸上ローリー価格は、リム情報開発株式会社(RIM)「LORRY RACK・レポート」の千葉、川崎、中京、阪神の4地区の平均値を採用(いわゆる4RIM価格とは異なる)。

⑤【国内製品・先物価格】〈TOCOM〉

TOCOM 東京湾及び中部石油製品期近物・終値を採用。

TOCOM東京湾は京浜地区海上バージ渡し価格(平均値)、TOCOM中部は中部地区陸上ローリー渡し価格(平均値)。

⑥【国内製品・小売価格】〈週動向調査〉

約2,000SSを対象に週次ベースのSS店頭における店頭現金価格の全国平均値を採用(資工庁公表)。原則として、毎週(月)時点の価格を調査し(水)14:00に公表(資源エネルギー庁-HPIに掲載)。